

審査の結果の要旨

氏名 平井 悠介

本論文は、アメリカ合衆国の教育哲学者であるエイミー・ガットマンの教育理論における民主主義概念の展開を、現代アメリカ教育哲学における平等論の変容との関連において検討したものである。

第Ⅰ部では、1980年代のガットマンのリベラリズム批判と民主主義的教育理論の形成が検討される。第1章では、ジョン・ロールズの「分配的正義」論に対する批判が検討され、教育における政治参加の意義が確認される。第2章では、1987年に刊行された初期の主著である『民主主義的教育』における政治的教育の特質が「意識的社会再生産」概念の確立と参加概念の関係から検討される。第3章では、ガットマンの民主主義論における思想的独自性が、コミュニタリアニズムによるリベラリズム批判の受容という観点から再確認される。

第Ⅱ部では、1990年代前半におけるガットマンの民主主義論の展開が、市民性教育や多文化主義的教育との関連において検討される。第4章では、1990年代前半のガットマンの民主主義的教育理論の展開が熟議民主主義にみられる市民形成的側面と、多文化主義的教育に対する市民教育理論の意義に着目して明らかにされる。第5章では、こうしたガットマンの議論の背景にある1990年代アメリカ市民教育理論におけるシティズンシップと民主主義の問題が検討される。第6章では、1990年代の市民教育理論における教育の国家関与と親の教育権限の問題におけるガットマンの立場が、国家の教育への関与という視点から明らかにされる。

第Ⅲ部では、1990年代後半のガットマンの民主主義的教育理論の深化が、熟議民主主義の現代的意義との関連において検討される。第7章では、ガットマンの民主主義的教育理論におけるアイデンティティをめぐる課題が論じられ、ガットマンにおける多様性擁護の主張が、熟議を通じての市民的徳の涵養に立脚しているものであることが確認される。第8章では、1990年代後半におけるガットマン理論の背景をなすリベラル派の市民教育理論の新たな展開が、民主主義理論の熟議的転回と市民教育論の視点から検討される。第9章では、こうした民主主義論の熟議的転回が、分配を基礎とした教育機会の平等論に対する批判に発して、市民の熟議能力の開発を重視する教育機会の平等論の提唱へのシフトをもたらしていることが明らかにされる。第10章では、このような民主主義理論の熟議的転回のなかにガットマン理論をあらためて位置づけ、そこに、熟議民主主義を支える原理としての互惠性と相互尊重の理念があることが明らかにされる。

以上のような内容をもつ本論文は、注目されながらも従来断片的にしか扱われてこなかったガットマンの民主主義論の教育哲学的意味の全体像を、1980年代から2000年代初頭までの一貫したパースペクティブのなかではじめて明らかにした点で、特筆すべき学術的意義を有する。特に、分配を基礎とした教育機会平等論への批判という1990年代の歴史的な文脈に熟議論的転回を位置づけたことは、市民教育論の思想史的文脈を吟味するうえでもきわめて重要な理論的貢献をなしたといえる。以上により、本論文は、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしいものと判断された。